

新 生

平成二十九年三月二十日印刷
平成二十九年三月二十日発行

新生第六十九巻 第一号



東北新生園入所者自治会

新 生

平成二十九年三月二十日印刷
平成二十九年三月二十日発行

東北新生園の概況

所 在 地	宮城県登米市迫町新田字上葉ノ木沢1番地
土 地 面 積	351,291㎡
建物延面積	25,280㎡
開 園	昭和14年10月27日
医療法承認病床	244床
標榜診療科	内科、外科、皮膚科、眼科、耳鼻いんこう科、歯科
現在入所者数	男28名 女43名 計71名
職員定員数	151名（平成28年4月1日現在）
園 長	医学博士 横 田 隆

東北新生園交通案内図



第六十九巻 第一号

宮城ハンセン協会招待
SENDAI光のページェント見学バス旅行
 — 平成28年12月13日 —



車窓からの
イルミネーション
 (仙台市定禅寺通り)



仙台を一望できるレストラン
 で食事をしました

園内日誌

平成二十八年 十月〜十二月

《十月》

五日 山形県里帰り旅行
 六日 秋田県湯沢地区結核予防婦人会慰問
 十二日 秋田県由利本荘地区結核予防婦人会慰問
 十四日 第二十八回コ・メディカル学術集会
 十九日 秋季バス旅行(仙台・定義山)
 二十三日 第十四回少年少女野球東北新生園大会
 二十五日 宮城県保健福祉部慰問
 三十一日 秋田県羽後町有志慰問

《十一月》

十日 第十五回パネル展
 十一日 第十五回パネル展・屋台祭り
 二十五日 東北新生園イルミネーション点灯式

《十二月》

八日 仙台高裁・地裁施設見学
 十三日 SENDAI光のページェント見学バス旅行
 (宮城県ハンセン協会招待)

【謝寄贈図書欄】

平成二十八年十月〜十二月 (敬称略)

多 磨 岡 山 県 邑 久 光 明 園	高 原 群 馬 県 栗 生 楽 泉 園	菊 池 野 熊 本 県 菊 池 恵 楓 園	始 良 野 鹿 児 島 県 星 塚 敬 愛 園	愛 生 岡 山 県 長 島 愛 生 園	青 松 香 川 県 大 島 青 松 園	甲 田 の 裾 青 森 県 松 丘 保 養 園	成 瀬 豊 画 文 集 青 森 県 松 丘 保 養 園 松 桜 会	ともに生きた証の記録	群 馬 県 栗 生 楽 泉 園	ハ ン セ ン 病 児 問 題 史 研 究 会 隔 離 さ れ た 子 ら	東 京 都 清 水 寛
---------------------	---------------------	-----------------------	-------------------------	---------------------	---------------------	-------------------------	-----------------------------------	------------	-----------------	---------------------------------------	-------------

平成29年3月10日 印刷
 平成29年3月20日 発行

発 行 東北新生園楓会(自治会)
 編 集 楓 会 文 化 部
 印 刷 川 内 印 刷 株 式 会 社

〒989-4601

宮城県登米市迫町新田字上葉ノ木沢一

東北新生園 電話 0228 (38) 2121(代)
 発行所 東北新生園入所者自治会 電話 0228 (38) 3600



新生・第六十九卷第一号……………目次

表紙……………「東北新生園と栗駒山」

年頭のあいさつ……………	楓会会長……………	瑛二……………
東日本大震災より六年……………	園長……………	令子……………
思い出、そして感謝……………	看護師……………	美津江……………
お世話になりました……………	看護師……………	光子……………
思い出と感謝……………	看護師……………	ひろみ……………
思い出と感謝……………	看護師……………	藤原……………

|| 新生文芸 ||

詩……………	選……………	佐々木……………	洋一……………
短歌……………	選……………	者……………	二……………
俳句……………	選……………	者……………	郎……………
川柳……………	選……………	者……………	晃……………
思い出……………	介……………	高橋……………	隆子……………
思い出……………	介……………	遠藤……………	千鶴……………
私にとつての新生園……………	介……………	伊藤……………	陽子……………
思い出……………	看護助手……………	石川……………	さち子……………
お世話になりました……………	看護助手……………	大内……………	きよ修……………
随筆「美声の介護」……………	看護助手……………	今野……………	小富……………
四コマ漫画……………	看護助手……………	村生……………	蝶士……………
園内日誌・謝寄贈図書……………	看護助手……………	看護助手……………	看護助手……………

年頭の挨拶

楓会会長 久保 瑛 二

新年明けましておめでとうございます。皆様には、お健やかに新しい年をお迎えになられたことと存じます。

二〇十七年を迎えて今年の先行きは、見えない多くの問題が高齢化になつている療養所にも吹き荒れるのではと思うところです。飛躍の年といきたいところですが、自分達の平均年齢を数えるとき侘しさが先に立ちます。

振り返りますと、当園の将来構想計画は平成十六年より可能性を積み上げる方式でその一歩を踏み出し今日に至りました。想い出しても、計画時の苦労が今でも思い出されます。

ハンセン病療養所の平成二十九年度の概算要求も耳にするところですが、入所者減による定員職員の削減等は療養所の将来に対する更なる不安が拭えません。当園の平均年齢も八十六歳を超える兆しが見え隠れしております。

以前も申し上げたところ敢えて申し上げますが、特に為政者の方々に御理解いただきたいことは、ほとんどの入所者は強制隔離に伴う重労働、不適切な治療による後遺症、また、高齢化

に伴う慢性疾患に苦しんでいるということを、従って取りも直さずに入所者への医療、福祉の拡充などの「国の法的責任」を認めた二〇〇一年の判決や更には「基本合意」を御一考願いたい。

具体的な対策としては基本的な療養所の有るべき姿として、医師の定数の充足、医療設備等、取り分け医療、介護は緊急且つ焦眉の急であります。

今、ハンセン病の施設の現状は「基本合意」に反し、より良い環境の提言、提供は私達にとって不満が募るばかりですし、ハンセン病の療養所が医療施設として存続すら危うくなるのではと、深刻度が深まるばかりです。

私達は組織を上げて高齢化と医療の進歩から取り残される不安を抱え、取りも直さず医療機関として存続するための方策を必死に模索しております。

先にも申しました様に二〇〇四（平成十七）年に施設の将来構想的なあり方を問われ、園内に分散する居住者を最優先と位置付けし、入所者が同じ所で暮らせるようにと進めております。従つて今後、各関係者の方々に於かれましても本年も何卒格別の御支援、御高配を賜ります様、お願い申し上げますと共に皆様様の御多幸と御健勝をお祈り申し上げ年頭の挨拶とします。

東日本大震災より六年

園長 横田 隆

東日本大震災より六年経過し、建物や道路の補修もほとんど終了したように思えます。しかし未だに、自宅に帰ることが出来ない被災者が多くいることを考えると、忘れずに常に心に思いを致すのは必要なことと考えます。

当時の事を思い出すと、詳細にわたり記憶は鮮明です。おそらくは宮城・岩手・福島県民はあの時刻、地震発生の時に自分が何をしていたか・・・それは生涯忘れずに覚えているだろうと・・・ちょうどアメリカ国民が、ケネディ大統領が暗殺されたときに自分が何をしていたかずっと覚えていたように、そう思うところです。あのときはちょうど金曜日、午後二時半に壁の時計を見たことを記憶しています。

かなりの量の決裁書類に判を押していたところで、週末はどうするかな・・・などと一瞬考えていました。突然、地鳴りとともに建物が揺れ出した。

この地鳴りが強烈で、今でも路上のトラックが近づいてくる音などに反応して、飛び上がったしまいます。また、映画館などの空調の音も遠くからの地鳴りのような気がして、映画に集中出来ない、一種のトラウマのような形になっています。

「このままここにいたら建物の下敷きになる・・・」恐怖心とともに二階の部屋から這うよ

うに手すりに掴まり、全体重を手すりに掛けながらやっこの思いで外に出たところ、施設管理主任も建物から外に出ており、「これが宮城県沖地震なんでしょうかあ！」と声を振り絞るように言ったものでした。

以前から宮城県沖には大きな地震が来ると言われており、私が学生の時にも大きな地震があり、そろそろ・・・と言われていたところでした。大地はしばらくの間、大きく揺れ続けました。外に出て、ようやく助かったと思い、すぐに病棟・不自由者棟に駆けつけました。幸い、人的被害はなかったのですが、どこがどのように破損しているか、それもすぐには把握出来ないところでした。

その瞬間から、すべての物流・電気・交通・通信などが止まりました。食料が入ってこない、停電がずっと続く、携帯電話だけでなく、固定電話・ファックス・メールなど、すべての通信が遮断されました。新生園は陸の孤島になってしまいました。入所者の無事を確かめた後、ただちに行わないといけなかったことは、自家発電用の軽油の調達と食料の確保でした。

当園の自家発電は一時間に軽油が百二十リットル消費し、非常に多くの軽油を集める必要がありました。一日に三回、一時間ずつの通電を行い、その間に入所者には食事をしてもらい、食事中はテレビをつけて、周辺での震災の被災状況を知ってもらいました。

しかし、この通電では看護職員が使用しているピッチの電源のバッテリーが落ち、同時にナースコールも不通になることがわかりました。今までの停電は常に数時間以内であり、電力会社よりいつ通電出来るか・・・との連絡がありましたが、あのときはいつ回復するかなどの連絡は一切なく、長期の見通しも全く立たない状況でした。停電は五日間続き、その間は三時間ごとに自家発電に給油を続けなくてはなりませんでした。

二人一組の職員に順番を割り当てて、夜中も給油を行ってもらいました。

新生園は内陸なので、津波の被害はありませんでしたが、職員の中には家族が津波の被害に遭い、行方不明になっていたものも複数人いました。そのような状況でも、園に留まってくれて三時間毎の給油を続けてくれたり、準夜・深夜勤務を続けてくれたことは大変にありがたく、今でもそのような職員と廊下ですれ違うときは、その時のことを思い出します。大きな津波の被害があった地域に自宅がある職員は、震災後、自宅の二階に乗用車が突き刺さっているのを目にしました。家族を探して四力所の避難所にも見つからず、肩を落として戻って来ましたが、私はかける言葉もなく、ただただ見守るしかありませんでした。また、沿岸沿いに暮らす息子さんが行方不明になった職員は涙を堪えて深夜勤をしており、「深夜明けたら避難所を回ってみる・・・」とポツリと言いました。夜間も園内を回っていた私はこの時も何も言えずに、ただ、気をつけて行って・・・と言うのが精一杯でした。どちらの職員もその後家族が無事に見つかり、私は本当に嬉しく、職員と握手して家族の無事を喜んだものでした。この時の経験は強烈で、ハンセン病療養所の入所者を守るのは職員しかいない・・・と確信しました。どこの外部の人たちが、自分たちの家族の生死もわからないのに、療養所に駆けつけてくれるでしょうか。療養所の職員だからこそ、入所者の事を守るのです。この思いはその後の園運営における一人かはその後転勤して園を去りましたが、まだ残っている職員も多くいて、私はいつも「何かあればまた頼むよ」と思っています。

職員は本当によくやってくれましたが、外部からの援助も忘れられません。外から助けてくれたのはまずは自衛隊でした。自衛隊は本当に頼りになる組織であることを実感しました。

災害本部としていた福祉室に一人でいた私は様々な対応をしていましたが、ようやく通じた電話を取ったところ相手は自衛隊で、何か必要物品はないか・・・とのこと。自家発電の軽油をすぐに頼み、ダメ元でガソリンも下さい！とお願いました。夕方、トラックとジープで軽油、ガソリンのドラム缶三本ずつ供給してくれました。これで一息つけるし、入所者関係で乗用車で移動が必要になったときにはガソリンは十分だ・・・とホッとしたことを覚えています。四人の隊員にこちらから手を差し出して握手を求めましたが、相手は分厚い軍手を脱ごうとしていたので、軍手のまま、両手で握りしめました。これほど日本国の自衛隊を誇らしく思ったことはなく、帰りは敬礼でトラックとジープを見送りました。

寛仁親王殿下も震災直後に侍従を通じて連絡をくださいました。侍従より「殿下は新生園のことを大変心配しておられます。何かいるものはないか？と仰せです」とのことに、軽油とガソリンがないのですと言おうとすると、侍従が続けて、「ただし殿下は軽油とガソリンは自分を持っていないからそれは園長が探すように・・・と言われています」と言われ、思わず電話口で吹き出してしまいました。震災後に笑ったのはこの時が初めてでした。殿下はよく園の事をご存じだ・・・と嬉しくなり、すぐに自治会長にこのことを報告しました。会長もこれは入所者に知らせようと言うことで、殿下のお言葉を放送で紹介していただきました。殿下が新生園を見守って下さるという思いで、あの時、力が再びみなぎったのを思い出します。その後、寛仁親王殿下は新生園に慰問にお出で下さいました。震災後に入所者はどうしているか？とご心配くださったのです。あの当時、殿下はお体のお加減が大変に悪く、十数回の手術をすでにされていましたが、もう一度手術をするかどうか・・・などと検討されていた時だったことを後になって知りました。ご自分のご体調が悪いときに、療養所の事を心配してくれてご訪問して下

さるということに、私はただただ頭が下がる思いでした。

これも殿下が薨去された後に知ったことで、そのようなことは当時は全くお話もされずに、ご自分のことよりも入所者のことを思つて当園に来て下さったことに私は今でも感動しているところ です。

登米市も早い時期に援助して下さいました。入所者だけでなく、職員にも食パンを配布してくれました。大学病院からの医師応援も、震災による交通遮断のために途絶えてしまったため、私は十日間、新生園で日当直医をしていたので、検査があるため、受け取りを遠慮しましたが、今でもあれはちよつと惜しかったな・・と思つています。気の毒に思つた職員が食パンを数枚分けてくれたのは忘れられません。

本省の室長、政策医療推進官、課長補佐の三人は、新幹線も不通の時に、路線バスと高速バスを乗り継いで当園に視察に来てくれました。震災後に本省へ電話連絡がついたのは三日目で、本省は 全く連絡が取れない・・新生園はどうなったのか、崩れたのではないかとずいぶん心配してくれたとのこと。電話で本省に連絡がついたのも、若い職員の機敏な対応のおかげでした。この他にも大震災という極限状態で、意外な才能能力を発揮してくれる職員に遭遇出来たのは収穫でした。

不自由者棟の中でも最も古いセンターは、自家発電の恩恵に与ることが出来ず、大変心配しました。ナースコールが使えなくなるのが最も困ったことで、入所者の命に関わります。

新しいセンターから外を通して電線を引いて、何とかしのいだわけですが、その後、私の中では常にこのセンターのことが引つかかっており、もう一度震災が来たらどうなるだろうか、停電になったらどうなるだろう・・という思いが強くなっていきました。防火設備の工事が始

まる前の昨年の十一月に三階建ての設備が整っているセンターに移つていただき、これからは入所者に安全に過ごしていただけると安堵しているところです。

新しく移った入所者で、三階建てのセンターは満床になりましたが、食堂で皆さんが賑やかに食事している姿は心が和み、保健所の医療監査でも所長より、福祉施設では出来るだけにぎやかに生活することが予後にも反映されます、三年続けて監査しているが、今回が入所者・職員に最も活気があり、非常によい雰囲気となっている。これが続けてほしい との言葉を講評でいただき、我が意を得たりと思つたものでした。

今回の移動はスケジュールの時間が短かつたため、入所者の方々には大変だったと思いますが、この日程はこれではなくてはいけないと判断したため、行つたものです。もつとあとに延ばすという選択肢はあり得ませんでした。転寮から一週間もしないうちに、津波を伴う大きな地震が来ましたし、二週間後には強風にて園の周囲九百戸に停電が起き、当園でも停電の被害があつたところでした。本当にギリギリ間に合つた・・と胸をなで下ろしたところでした。入所者の方々には、震災にも火事にも強い三階建てのセンターでの生活をどうか楽しんでいただきたいと切に希望しております。

今年 は病棟治療棟複合施設の建設がいよいよ始動します。自治会と検討を重ね、年単位で計画が進められていたのですが、本省その他の関係者のご尽力により実現に至りました。入所者の方々にとって安心で利便性のよい作りになるよう工夫しようと考えており、これから「入所者第一」の考えの基、園の運営に携わっていくつもりであります。

思い出、そして感謝

看護師

菅原 令子

時の経つのも早いもので、今年の春で退職になります。皆様、長い間お世話になりました。

定年退職と言う言葉は、ずっと先の事として働いていましたが、昨年のころから意識するようになり、あと何ヶ月と数えて、もう残すところ三ヶ月を切っていました。

思い起こせば今から二十六年前の平成三年に賃金職員になり、二年四ヶ月後に定員職員になりました。奉職時はハンセン病の事は、殆ど無しに等しいくらい知りませんでした。

不自由者旅行のバスの中は歌と話で盛り上がり、隣の人との会話も聞こえないくらいの賑わいで、帰りのバスではお土産がいっぱいなのに驚き、買い物も旅行の楽しみだったようです。

センター内のレク行事も年間通してあり、入所者の方と共に歌ったり踊ったり、カラオケや芸をしたり、司会も行い、会を微力ながら盛り上げ、たのしい時間を共に過ごさせていただきました。

今日まで多くの方々との出会いがあり、多くの方々との別れがありました。ここで学んだことは人の力強さと、温かさです。色々な行事がある度に一緒に歌ったり、踊ったり、ともに笑ったり、入所者の皆様の温かい協力に感謝します。これから皆様に負けないように、第二メープルケアセンターで取り組んだ口モ体操を続け、若さと健康を保ちたいと思います。

皆様様との出会いと思い出に感謝します。ありがとうございました。

最初に配属した所は外科でした。その日から勉強しました。入所者の方の名前と顔を覚えるのが大変でした。

次に処置の習得でした。ナースの皆様がクーパーで皮を切っているのを見学し「やらないと覚えない」と言われ、なかなかうまく切れなかったことを思い出します。今も変わりなく上達していません。

職場の雰囲気や業務が少しずつ慣れてきた頃、カラオケ大会があり入所者の皆様や先輩の方々から「新人は必ず歌う事になっているんだよ」と話されていました。一人では上がってしまい歌えないし、音痴だしと思っていた時「二人でもいいよ」と言われ、麦畑を二人で歌いました。その時は上がってしまい、何をどう歌ったのか記憶がなく。ああ終わったとほっとしたことを覚えています。

秋の大運動会は盛大に応援合戦と共に、競い合う声がグラウンドいっぱいに響き、若い日の頃が甦りました。

お世話になりました

看護師

菅原 美津江

この度、三月で定年退職を迎えることになりました。

これまで支えて下さいました、師長さん始め副師長さん、スタッフの皆様、多くの方々

に感謝申し上げます。私は縁がありまして平成二十六年九月一日付

けで「東北新生園」に中途採用させて頂きました。二年七ヶ月と短い期間でしたが、これまで長い看護師生活を送ってきた中、看護の基本となる患者様に寄り添った看護を目の当たり

にして、多くの学びをさせていただきました。自己の都合により前の職場を退職し、看護の現場から一時離れていたため、不安と緊張がいつぱいのスタートでした。

看護の仕事から距離を置いてみて、やはり私は看護の仕事を続けたい、と思いがあつた再就職でしたが、入職した当初はなかなか環境に溶け込めず失敗の連続でした。

残念ながら私には、語られる多くの思い出となるような事はありませんが、入職二年目に入り、治療棟から第一メーブルケアセンターに向かう廊下より見える、高松宮妃殿下寄贈の「紅梅白梅」がきれいに咲き誇っている様子を見て、癒される思いがし、少しずつ気持ちに余裕を感じることが出来るようになりました。

その頃から入所者の方とのコミュニケーションがとれ、想いに近づけていけたのではないかと思います。

家族の事情や私自身が体調を崩したり、継

続できるかどうか自信を失いかけた時、上司の励ましや同僚の看護に対する姿勢を身近に感じ、この日を迎えることが出来て、感謝の気持ちでいっぱいです。

新生園で得られた学びはこれからの糧にしていきたいと思います。

今後とも入所者の皆様、職員の皆様、お体を大切にされ、日々過ごされることを願っております。

本当にありがとうございました。

思い出と感謝

准看護師

佐藤光子

三月で定年を迎えることになりました。皆様、長い間お世話になりました。

私は平成元年四月、一週間の産休代替で不自由者棟へ配属となりました。右も左も分からないまま、賃金職員採用になり病棟へ配置換え。病棟では三交替で夜勤もありました。

これまで夜勤は経験がなく、深夜勤務で時間に間に合うように起きられるかが心配で、目覚まし時計を三台使用しました。

子供が眠ったら、茶の間でちよつと横になる程度でした。さらに子供が小さく、夜勤と

いう時に特にぐずって寝ない等、身を切る思いで家族にお願いして、仕事をした記憶が思い出されます。

それから一年二ヶ月で定員採用となり、治療棟外科勤務に配置換えで、入所者の方の名前と顔を覚えるのが大変でした。これは私の苦い思い出です。

先輩や入所者の方から「処置をしないと覚えられないんだから、やってみろ」と言われ、爪切りです。台の上に乗せられた左足をカットし外科をする。次に私は「反対の足を出してください」と言いました。その入所者の方は「足がおがったら、爪を切ってもらおうから」と笑いながら帰って行ってしまいました。その方は右足に義足をはいっていたのです。

心が折れました・・・

それでもその方は時々外科に顔を出してくれて、処置をさせて頂くようになり、失敗しながらも今日に至ります。

約三十年前は入所者の方も多く、行事も盛

んに行われていました。

観桜カラオケ発表会、ゲートボール大会、合同散歩、バス旅行、不自由者棟おたのしみ会、特に入所者の方と一緒にあった運動会は楽しかったです。あの頃は私も皆さんも若かったです。綱引きは後で筋肉痛がひどかったです。大きな声で応援して忘れることは出来ません。

入所者の皆様の心優しさ、職員の皆様、そして家族の支えがあった事に感謝しております。入所者の皆様、これからもお身体を大切にお元氣でお過ごしください。心からお祈り申し上げます。

大変有難うございました。

思い出と感謝

准看護師

藤原 ひろみ

まだ若い気でいたら新生誌から、原稿依頼があり、定年を迎える年になったと改めて感じております。

私は古川市内（現在大崎市）で勤めている時に縁があり新田に嫁に来て、初めて新生園の事をしりました。ハンセン病の事は全く分かりませんでした。そんな私が迫町の住人になってから数年後に入職する事になりました。

平成四年に産休代替えとし入職し最初の勤務は治療棟の外科です。長い処置台があり、入所者と看護師が向かい合って処置をしてい

ました。右も左もわからず夢中で先輩の指導を受けていると、入職三日目に突然「明日から栗駒に行ってもらいます」と治療棟の師長さんに言われ「え、栗駒山に」と慌てた事を思い出します。（寮名とはしらずに今では笑い話です）

次の日から栗駒センターに行く事になりましたが、センターまでの道も分からないありさまでした。栗駒センターでは入所者の皆さんの名前を覚える事から始まり、処置の仕方、先輩から指導を受けて、覚えるのに必死でした。

当時の栗駒センターは栗駒、楓、戸伊摩、松風寮が繋がって一棟になっていて、北斗を建てている最中でした。

入職して四日目に、今度は工事要員として勤務する事になりました。一年間勤務した頃には北斗寮も出来上がり、平成五年四月で私の契約が切れることになっていました。

そんな時「またここで働きたいと思っています

るか？」と入所者の方から声を掛けられ「はい出来れば：」と返事をしたら、その方は「契約が切れたら、またすぐに履歴書を出しておくといいから」とアドバイスをして頂き、本当にありがたい気持ちでいっぱいになりました。センターのスタッフの皆さんにも盛大に送別会を開いてもらいました。

入所者の皆さんにお別れの挨拶を始めた頃、突然呼び出しがあり「五月の連休と数日間休んで、病休代替として引き続き働いて下さい」と辞令を頂きました。あの時は続けて働ける喜びと嬉しさでいっぱいでした。その反面送別会までして頂き、申し訳ない気持ちでした。その後も栗駒センターで働いているうちに、賃金職員として採用になる事が出来ました。その後は病棟、治療棟、不自由者棟と一年間隔で勤務交替があつたと記憶しています。（今は、二年以上になつていますね）

交替した先々でも仕事の内容が違つていて、先輩方の指導をメモして早く仕事を覚えるの

に二回行くことが出来ました。名古屋での開催時にはメンバーと試合前に味噌カツを食べ、頑張つてメダルを貰つてきました。

人生で初めての飛行機の旅でした。（当時のチームの皆さん有難うございました）懐かしい思い出がよみがえります。

さて私事になりますが、退職の日を目の前にして身体を壊してしまい、無事に勤め切る事が出来るのかと不安がありました。スタッフの皆さんの励ましや支えがあり、なんとかこの時期を迎えることができました。

二十四年前に入職する事が出来て、そこで入所者の皆様と、多くのスタッフの皆様と出会い、たくさんのお思い出ができて、いろいろな経験をする事もできました。本当に心から感謝申し上げます。入所者の皆様、職員の皆様、お身体を大切に元気で過ごして下さい。

大変お世話になりました。ありがとうございます。

に必死の毎日でした。幸い私の看護師人生は、外科から始まったので、傷を見る事には抵抗はなかったのですが、硬くなった皮を切るは特殊でした。クーパーを上手く使わないとなかなか皮が切れない事もあり、四苦八苦したものです。今は保護材がありベンチ切除する入所者の方は少なくなりました。

当時約二百八十名の入所者の皆さんがおいでになり、治療棟を始め不自由者棟、一般寮はいつも賑やかでした。行事もいろいろありました。職患運動会、春、秋の不自由者旅行、カラオケ発表会、ゲートボール大会等々があり、新人泣かせだったのが、カラオケ発表会です。新人は必ず出演の依頼があり、私も漏れる事なく舞台上に立ったものでした。（今思えば貴重な思い出となりました）

それからゲートボールです。先輩や入所者の方の勧めで始めましたが、なかなか上達できず迷惑をかけて練習や試合に参加しました。メンバーが上手だったので、私まで全国大会



★東北新生園 イルミネーション点灯式★

—平成28年11月25日—



詩

佐々木 洋 一 選

◇ 入 選 ◇

《帰郷》

北辰 一 硯

三十八年振りに隠れて園を出た
誰にも分らぬように・・・
寮の介護員さんにだけ話しての
逃走である

正門から一般者のように

すうっと出た
ここまで来れば一安心だ
誰もとがめる人はいない
見る物すべてが新鮮で
道端の草も木々も
私を歓迎しているように映る

前日の夕方ふる里に電話を入れると
弟の嫁が出た

「明日家に行きたいが」と
尋ねるとあっさりと弟の嫁が言う
「来て下さい」

弟は漁船に乗って
家にはいないが嫁いだ妹を
呼ぶとの事だった
一晚中あれこれ考えがめぐり
眠りにつく事が中々出来なかった

佐沼の街を過ぎ
北上川沿いにどんだん

石巻方面に車は走る柳津の
虚空蔵様入口の看板を横目に
見ながら登米の大橋を渡る
飯野川町に入り飯野川橋を渡ると
信号があり道を横切って
新北上川の土手道に入ってゆく
飯野川町は昔郡役所や
色々な役所があった所である
新北上川の土手を下り乍ら
葦の生えている群落が見事である
音の百選にも選ばれている

やがて釜谷峠の入り口に入ると
トンネルになっていて
びっくりした

十九折りの峠を登らなくても
スムーズにトンネルに

吸い込まれてゆく
五分位いかかったような気がした
畳一枚位の大きな硯の看板が

目の前に飛び込んで来た
実感が胸に踊るのを禁じ得なかった
左に曲がると右には伝統硯会館
小学校が左側に見える
懐かしさがこみ上げて来る
真っ直ぐ進むと役場あり
右に曲がると海が見える
その道は役場に
つかいに来た馴れた道だ
外壁はすべてスレート葺きの家だ
「雄勝伝統」の硯看板も見えて来る

坂を登ると牡鹿半島と金華山が
見えてあの三角に見える山が
「金華山だ」と声を上げた
懐かしさが募るばかりだ
ここから三分で家に着くのだ

「心がはづむ」
目の前に貢尻島、八景島が

お帰りなさいと声をかけてくれる
ふる里の海だ、夢に見た海だ!!
涙がこみ上げて来る

泳いだ海、魚釣りした海
網で魚を獲った色々な思い出が
走馬灯のように浮かんで来るのだ
あっという間に家に着いた
私の生まれた家は古くなり
元の土地に新しく家を継いだ
弟が立派な家を建てていた
先ずはご先祖様に父母、弟に合掌
今帰って来た事を報告した
本家の婆さん
妹はバスで来てくれた
挨拶もそこそこに募る話に
時間が経つのも忘れ
話し込んでしまった
帰りは妹に家に

寄ってほしいと頼まれ
車に乗せて
石巻經由で帰る事にした
あの時代は日本経済は上り調子
私達育った時代とは違って
昔のようにカマドもなく

炉ばたや台所もなく懐かしさもなく
立派な家が箱庭のように建ち
二階造りはあたり前となり
人間関係はうすらいで
どの家にも車一台、二台とあり
子供達は幼稚園通いの時代である
妹の旦那も船乗り子供達も二人
働いているとの事だった
家も新築したばかりだという
みんな幸せに暮らしている事は
何よりと思いい乍ら妹の家を後にし

新生園に帰りました

ふる里に帰った事が私の励みとなり
生きる力が
倍増してゆくのを感じ乍ら
またふる里にゆく日を楽しみに
大きな夢を見ていました

【選評】

《帰郷》

北辰一 硯

ふるさとに帰る作者の高鳴る気持ちだが、スト
リートに出ている小気味がいい。
ふるさとでは、わだかまりのなくなった近親者
からのおもてなしに、作者は素直に感謝している。
生きる喜びが実感として伝わって来る力作であ
る。

◇ 佳 作 ◇

《雪》

今 野 きよし

夜が明ける
外を眺める
ガラス越し
白い物が
ぱっと見えて来た
雪だと叫ぶ
小さな声で
年がいもなく
いくつになっても
声に出る
野も山も
真白く化粧して
枯れ木の枝に花が咲く
向こうの屋根も
電波塔も

白く見える
がらりと変わる
雪化粧
うれしいような
身ぶるい
するような
明るい心と
暗い心と
様々に
今朝の雪
来る物来た
静かに思う
雪は真白
空はだんだん
青空に
変化して
雪と青空
調和が取れた
景色となって
雪の化粧を
楽しんだ

短 歌

皆 川 二 郎 選

◇ 入 選 ◇

北 辰 一 硯
岩泉町の集落襲う台風が老人ホームを
一気に飲み込む

【選 評】

平成二十八年は自然災害の多い年であったが、作者は、その災害の悲惨さを見過さず一連の連作に収めている。事実をありのままに表現した強さを感じられる。下の句の把握がよりそのすさまじさを描写している。

今 野 きよし
外燈の光りを眺めありし日の活気あふ
る療友の顔

【選 評】

外燈の光りを眺めていると、活気あふる療友のありし日の顔が浮かんでくるという。限られた世界の中で生活してきた友の活気あふれる姿は印象深く心に残ります。作者自身の日々の姿も一連の作品に表現されており心打たれました。

北 辰 一 硯
三ヶ月飲みし薬を休止してだるさのと
れしところ清しき

【選 評】

三ヶ月間薬を飲んだが、病が治ることがないので、その薬を休止したところ体のだるさが取れて心まで清々しくなったという歌意である。医学的なことは分からないが、素直な実感が表白されています。

◇ 佳 作 ◇

北 辰 一 硯
台風の被害に悲惨さ目に余るテレビ画面に見入る哀しさ
二度三度北海道狙われ台風言葉失う
温暖化ゆえか
列島の今年は災害多くして心の休まる
事もなかりぬ

今 野 きよし
かたこととベッドの上で物探す盲いの妻
の退屈凌ぎ
物忘れこんなになったか吾ながら悔いの
残りの数々ありぬ
腰痛し膝も痛い認知症じわりじわりと
進むもつらい
酒気帯びて威勢あふるる療友の無邪気な
顔に今は変りぬ



◇ 入 選 ◇

園 永 泊
改まる言葉輝く御元日

【選 評】 年が改まって御慶を申す。
この一言は力強く生きているよ
ろこびが輝き元日の山河に心洗わ
れる尊さがある。
新年おめでとついでいます。

今 野 きよし

去年今年癩癧玉の残りおり

【選 評】 去年今年に「去年今年貫人棒の
ごときもの」虚子の有名な句がある。
こちらの癩癧玉には色々ある。怒りやすい性質、
子供のおもちや等、残りおりで新
しい年を静に迎えられる事と思
います。

斎 藤 照 雄

健康を祈り七草粥すすり

【選 評】 春の七草は万病を除くと言われ、
正月七日に芹、なずな、御形等七
色をきざんで入れたお粥。
色の鮮やかさが健康の源あろう
し、すすりこそが人生の祈りあろう。

◇ 佳 作 ◇

園 永 泊

清めたる掌で迎えたる初日出
蛇口より若水受ける療養所
とにかくも生き抜いた人のお正月
茶柱を信じる朝が御元日

今 野 きよし

田の水の僅かに残り初氷
野も山もきれいにかざり雪化粧
大声の口コモ体操年の暮

斎 藤 照 雄

腕組んで麦踏む人や父に似る
どこからか琴の音聴こゆ春の海
寒稽古裸、裸の人の山



◇ 入 選 ◇

桜 山 南 仙

《人位》
人形の手を温まるほど握り

【選 評】

人形は文字通りの人形か、または
比喩としての人形なのかと思う。
どちらにしても、温まるまで握り
しめることは深い愛情表現であろ
う。人は一人生きるのではなく、
人との触れ合いによって生かされ
るものである。

《地位》 千 歩

春を待つ子だくさんのシクラメン

【選 評】

シクラメンは晩秋から冬に咲く
花。春には咲く日を待って、新芽
を付ける時節である。
やがての咲く日を夢見て土中に
深く眠る芽を思う。

斎 藤 照 雄

《天位》
荒波に泣いた日もあるハ氏病船

【選 評】

「ハ氏病船」はハンセン氏病棟
のことであろう。
かつてハンセン氏病については
偏見があり、隔離病棟で人権蹂躪
に晒された時代があった。その苦
しみの日々を吐く、貴重な一句で
ある。

◇ 佳 作 ◇

桜 山 南 仙

七草粥ほのかに香る国の味
忘れたい事にぐい呑み二、三杯
日本の言葉が生きる松の内

斎 藤 照 雄

ハ氏病船どっち向いても老朽化
ハ氏病船難破しそうな日は祈り
ハ氏病に勝って故郷へ凱旋す

長 沼 蓮 花

とりの年復活目指セイヌワシ軍団
故郷の友も見てるか初日の出

今 野 きよし

文化祭作品に酔い吾れに酔い
いやなこと語ったのどもかすれ声

桃 生 小富士

ペン先が雪の言葉を紡いでる
おしゃべりに飢えていますか独り部屋
去年今年五七五と手をつなぎ

千 歩

恋じゃないビビッときたのは静電気
病床の旅の約束春を待ち

思 い 出

介護長

高 橋 有 子

私は昭和五十六年七月、国立療養所東北新生園に賃金職員として採用されました。最初に配属されたのは薬剤科です。

薬剤科では薬剤科長の澤田先生や薬剤師の石垣先生が、薬剤助手として何もわからない私を、一から指導してくださいました。

現在、薬剤科の建物は新しい場所に移転しています。移転する前は歴史を感じさせる木造平屋建ての建物でした。

当時、薬剤科の周りの建物は、真新しい建

物だったので、余計にそう感じました。

「薬剤科もいつかは新しい建物になるのだろう」と楽しみにしていたのですが、いざ古い建物がなくなると思った時には、寂しさを感じたので、自分でも気づかぬうちに愛着をいだいていたのだと、しみじみ感じたものです。当時、薬袋に記載する必要事項はすべて手書きでした。何度も手書きをしていくうちに、入所者全員の氏名と職員の氏名を覚えることが出来ましたが、顔と氏名が一致するまでは苦労しました。

治療棟では、入所者の方が待合室で順番待ちをしている間、皆さんの賑やかな声が薬局窓口にも聞こえてきたものでした。皆さんの声を聞いたたび微笑ましく思いました。曜日によつては薬局前にも長椅子が仮設置されることもあり、なかなか皆さんと会話をするチャンスがない私には、良い機会となりました。

平成九年七月より、介護員として不自由者

棟山鳩センターへ配属されました。介護職は初めてだった為、慣れない業務で不安でした。先輩にその都度指導して頂いたので、感謝しながら一日でも早く仕事を覚えられるよう努力しました。業務の流れや、入所者の方への介護の関わりなどに自信がつく頃には、この仕事を続けていきたいと思うようになりました。

私が一番印象に残っている行事は、今は無き職患運動会です。

運動会が開催されていた時は、自分や入所者の方も若く元気に活動していました。どれほど元気だったかというと、競技中はもちろん、準備中も走り回るほどでした。生き生きしている入所者の方の様子を見て、こちらも応援に力が入ったものです。運動会終了後には、皆さんが景品を抱えて満足気に帰って行く後ろ姿を見送ったものでした。

現在、山鳩センターは建物が残っているだ

けです。昨年十一月に入所者全員が、第一メーブルケアセンターに転寮しました。引越の際には皆様のご協力で、無事に終了したことに感謝しています。そして入所者の皆様には大変でしょうが、新センターに一日も早く慣れてほしいと願っています。

楽しかったこと、嬉しかったこと、色々ありました。入所者の皆様、職員の皆様、お体に気を付けてお過ごしください。

長い間、本当にありがとうございました。

思い出

介護長

遠藤 千鶴子

私は昭和五十七年四月に賃金職員理容師として採用されました。

午前中は不自由者棟に出張していましたが、昔の高砂寮、泉・寿寮があったころは居室の廊下や、居室の外で床屋をしていました。

外で床屋をするときには、入所者の方から背もたれの無い木の椅子を借りてしていました。が、安定感がないため急いでしていたように思います。

理容室勤務の三人でよくお昼休みに、各教会や、園内を散歩しながら見て歩きました。すぐく年数の経った藤の木が教会にあり、花が咲く季節はとても綺麗でした。

また入所者の方の畑には草ひとつなく、野菜はとても大きなものばかりでした。たまに珍しい花など頂くことがあり、理容室の横の花壇に植えていました。その頃から花に興味を持ち、集めたり、名前を覚えたり、温室にも行き植木物も買っていたような気がします。

美容室は、私が入ったころは週三回の勤務で、理容師が交代で助手として手伝っていました。が、実際助手だけではなくパーマをかけたり、毛染めもしました。最初の頃はパーマに慣れてなく、髪を巻くロットから髪がはじけて、とても大変でした。入所者の方も不安だったと思います。

私が理容室勤務の頃、園内の行事でゲート

ボール大会に一度だけ誘われ、運動が苦手なんですが断り切れずに参加しました。やはり第一ゲートが通過できず、ずーっと立っているだけでした。その時一人の入所者の方から左側で打ってみると言われ、左で打ったら第一ゲートを通したんです。あの時はとてもうれしかったのですが、よく考えるとステイックを持つ手が逆だったのかなあと思います。

理容室には十九年お世話になり、平成十三年一月に義母が他界し、四月に介護員として定員採用になり、山鳩、明峰センター勤務となりました。

理容師から介護員に。職種が違い、当直まであるので私自身は忙しく、家族（家では男三人）はご飯も炊けない人達でしたので、コンビニ弁当です。

介護員として最初の山鳩センターから、今の第二メープルケアセンターで十五年、理容

室時代から三十四年間、入所者の皆様、スタッフの皆様には、たくさんの思い出やご指導を頂き、心から感謝の気持ちでいっぱいです。入所者の皆様、お身体を大切にして、元気にお過ごしください。

大変お世話になりました。

私にとっての新生園

介護長

伊藤 陽子

私は、昭和三十一年生まれの六十歳。退職なんですね。歳月の流れは、ほんとに早いものです。

私が新生園に最初にお世話になったのは、旧売店のある頃の平成二年です。自治会で運営されていた売店を、初めて外部委託されるという事で「ウジエスパー」の店員として入りました。「ミニ・ウジエスパー」という感じで、何でもありました。

特売チラシが入った朝には、たくさんのお客の方が開店前のシャッターの前に並んで待っていて下さいました。

人気があったのはリポビタンD、オロナミンC、洗剤、ペーパー類でした。食べ物ではおにぎりやお餅が好評で、あんこ餅、くるみ餅、納豆餅など毎日注文を受けました。本当に楽しかったです。残念ながら、二年で撤退してしまいました……。

その時に新生園の職員として働かないかと声をかけて頂き、看護助手として採用され十五年も経ってしまいました。

最初は、経験も知識もなく何もわからなかったのですが、いろいろな失敗を繰り返すうちに周りの迷惑をかけたのだと思います。私にとつての常識が非常識に変わること、少しカルチャーショックもありましたが、先輩方や入所者の方々からのアドバイスのおかげで、これまで続けてこられたのだと、深く感謝しております。人生の一時に、新生園の入所者の皆様、職員の、スタッフの皆様と関わり合えた運命を嬉しく思います。

今後の皆様の御活躍、御健康を祈念しつつ、いつかどこかで……シニユーアゲインです。

思い出

看護助手

石川 さち子

いよいよ三月で定年退職です。振り返ってみると、平成三年四月に福祉室の包帯再生に作業手として採用になり、二十五年になります。

当時の仕事で除草作業があり、紅梅白梅の草取りを同僚三人でしていた時の事です。入所者の方に「こんな所さ牛が三頭もいだつちゃ」と話しかけられ、紅梅白梅の周りが白い柵で囲われており、白衣姿で下を向いて草を取っている様子が、まるで乳牛がいる様に見えたと笑って話をしていたのです。ユーモアのある話に、三人で大爆笑したこ

とが思い出として記憶に残っています。

また盆栽愛好会の旅行で山形の南陽市に付き添いで行った際、記念にシャコバサボテンを購入したことがありました。花の知識など全くない私が、申し訳ないことにあまり世話もせず、二十年が過ぎ去っていききました。

サボテンは今でも枯れずに生き続けてくれています。購入してから花が咲いたのを見たのは五、六回だったと思います。

ところが今年はどういうわけか、一際きれいに咲いてくれました。サボテンを見ると昔の入所者さんを懐かしく思い出します。

私は平成二十四年看護課へ配置替えとなり、五十五歳にして介護員一年生です。その当時は仕事で失敗し落ち込むことも多々ありましたが、師長さんを始め、先輩や同僚の方々のご指導や励ましの言葉をかけて頂き、何とか今日まで働くことが出来ました。

入所者の皆様にはお体に気を付けて、楽しく穏やかな日々を送って頂きたいと思っています。

本当にありがとうございました。

お世話になりました

看護助手

大内 修

平成四年に東北新生園看護助手に採用され、約二十五年勤めさせていただき、三月で退職することになりました。

最初に配属されたのは、山鳩センターでした。それまでとは全く違った福祉という畑違いの仕事で「果たしてやっていけるのだろうか・・・」と不安でいっぱいでしたが、スタッフを始め入所者の皆さんの励ましの言葉、ご指導のおかげでいつしか不安が楽しみに変わり、福祉という仕事の面白さが分かってきて、楽しく働かせていただきました。

行事としては不自由者旅行、運動会、春と

秋のカラオケ大会等があり、中でもカラオケ大会には五回出場させていただきました。

大会が近くなると出場される入所者の皆さんと「ここは、こういう風に歌った方が良いかも」等、言いながら練習したことが思い出されます。

今、定年後は何をしようかと考えているのですが、趣味といっても温泉めぐりと釣りしかありません。

しかし東日本大震災後、海が怖く釣りをやめてしまい、今では道具が埃をかぶっている状態です。代わりに考えているのが「そば打ち」です。うどんは打てるのですが、そばはやったことがないので、ぜひ習ってみようと計画中です。店を出す気はありませんので悪しからず・・・

入所者の皆さん、これからもご自分の体を大切にし、元気にお過ごしください。

これまでのご厚情に深く感謝し、ご挨拶に代えさせていただきます。

大変お世話になりました。

美声の介護員

今野 きよし

A 入所者 B 介護員

B おはようございます。今日はこちらの部屋の係なんです。宜しくね。

A 私の方こそ宜しくね。お世話になります。始めは何からしましょうか？

A それでは、ちりかこの物を集めてもらいます。

次に補食の用意なんです。

ほうれん草とキャベツのおひたしとポット二個を係りの方にお願ひして下さい。

和子さんの声、良い声ですね。

鈴を振って鳴らしているようです。

B これからは鈴音さんと呼びますか？
私は口下手なので、失礼のないようにと気を付けているんです。
A 私はもっと話を聞きたいですね。鈴振る声で。

B 私を褒めても何も出ませんよ。このままです。何かあると思つたのですか？
A はい、思いました。

B 私はいつも居るのか、居ないのか分からないと言われております。
A そうですか、無理にお願いしても困らせるだけですね

B これで午前の用事は終わりました。
A あとは午後二時過ぎに参ります。
A はい、ありがとうございます。
午後二時過ぎですね。

「午後になった」

B 洗濯物持つて参りました。
A それでは筆筒をお願いします。
B はい、筆筒ですね。仕舞い終わりました。
A 鈴振る声に聞こえましたか？
A 聞こえました。鈴振る声に。
B 又、参ります。
A 鈴振る声を待つて居て下さいね。
A ありがとうございます。
A 話しかけ 鈴振る声の 帰り来る

原作・桃生小富士
まんが・北村小蝶



4コマ まんが たんじょうび



平成28年11月10日・11日
第15回 パネル展・屋台祭り
西 夕子民謡・演歌ショー

